

春の記憶

春の時間は長く、ゆっくりと伸びてゆく。

あちらこちらでひらきつつある花々の微かな匂いが風に乗って来て、生活空間に漂う様々な匂いと入り混じり、あたたかく匂っている。春のひかりについての、抽象画を描いてみたくなる。連綿と続く歴史を通じて、先人達が繰り返し、それこそほんとうに幾度もうたって記してきた春の訪れを、長かった冬を耐えてきて生まれるよろこびを感受する。現在に小さく存在しているわたしも何だか訳もなくうれしくなって、うたを残しておきたくなる。

冬の疲れなのか、春は頭がぼんやりとして、霞のなかを流れているように思えて、あやうく用事を忘れそうになる。仕事場では、パソコンの画面に反射するからと、カーテンが引かれているので、気分転換に太陽の光を浴びようと思い、静かな階段を降りてゆく。開いた扉から柔らかい陽の直線が床に射している。外に出ると、光が思ったよりまぶしくて、手をかざす。ああ、春の風だな、と思う。そして、かつて春が来たことの記憶の底が、ふと浮かび上がってくる。そういえば春はこんなふうだったかな、とどこかなつかしいように思う。感情そのものが、そのままではないにしても、記憶されているのらしい。小学校などに通っていた頃の、あの時間がゆったりとあって、頭がぼんやりとして、数センチ宙に浮いた感覚。

重ねてきた春の記憶は、わたしをいわば年老いた人にする。そしてそれと関わりがあるのかないのか、どこかで次々と再生するものたちを思う。

この二度と訪れない新しい春の記憶を、散らばって記憶する。もしかしていつかの未来に、誰かがふと見つけてくれるかもしれないとぼんやりした頭で思う。そしてわたしもまた、埋め込まれた誰かの春の記憶を探しに、染井吉野の透きとおる花びらを見上げながら、ずっとずっと遠くまで、往ける限りのところまで、歩いてゆこうと思う。

2016年3月5日